

男子ハンドボール競技における低身長センタープレーヤーのドリブルについて

佐藤 陽太 (201911886、ハンドボールコーチング論)

指導教員：山田 永子、會田 宏、藤本 元

キーワード：記述的ゲームパフォーマンス分析、世界トップレベル、学生レベル

【目的】

本研究では世界トップレベルの低身長センタープレーヤーおよび本研究者を対象として、攻撃におけるドリブルの特徴を明らかにし、低身長のセンタープレーヤーおよび今後競技を継続する本研究者の競技力向上に役立つ知見を得ることを目的とする。

【方法】

2021年から2022年の男子ハンドボールにおける世界トップレベルの低身長センタープレーヤーLuc steins(リュック・ステイン、オランダ)、Luka cindric(ルカ・シンドリッチ、クロアチア)と日本学生トップレベルの本研究者佐藤陽太(以下、「佐藤」とする)の3名を対象としてドリブルプレー879シーンを標本にした。

分析項目は(1)ドリブルの有無①ドリブル有り②ドリブル無し(2)ゲーム局面①速攻②遅攻③クイックスローオフ(3)ドリブルの高さ①High②Low(4)ドリブル技術①Parallel②Cross③Far④1on1 timing⑤Below⑥Near(5)ドリブルの回数①1回②2回③3回④4回⑤5回(6)その後のプレー①パス②シュート③1on1④ターンオーバー⑤フリースロー⑥7mスロー獲得であった。

分析結果についてはカイ²乗検定と残差分析を用いて比率の差の検定を行った。有意水準は5%未満とした。

【結果と考察】

それぞれの特徴について

(1) Luc

速攻においては、ドリブルの高さはHigh(83.9%)が多く、ドリブル技術はNear(58.1%)を使用することが多い。遅攻においてはドリブルの高さはLow(97.1%)が多く、ドリブル技術ではParallel(62.8%)を使用し、横方向へ揺さぶりながら攻撃を展開していることが考えられる。その中で変化をつけるためにCross(15.3%)、Below(13.9%)、を使用していると考えられる。クイックスローオフにおいては、ドリブルの高さ、ドリブル技術に有意差はみられなかったため、相手の防御状況に応じてドリブルの高さ、ドリブル技術を使い分けていることが考えられる。

(2) Luka

遅攻においては、ドリブルの高さはLow(98.8%)

が多く、ドリブル技術はParallel(69.3%)を使用し、横方向へ揺さぶりながら攻撃を展開していると考えられる。また、ドリブルをしてから1on1(82.6%)を積極的に試みていると考えられる。クイックスローオフにおいては、ドリブルの高さ、ドリブル技術に有意差はみられなかったため、相手の防御状況に応じてドリブルの高さ、ドリブル技術を使い分けていることが考えられる。

(3) 佐藤

速攻においては、ドリブルの高さはHigh(89.8%)が多く、ドリブル技術はNear(89.8%)を使用することが多い。遅攻においてドリブルの有無に有意差はみられなかった。ドリブルを使用する場合は、ドリブルの高さはLow(98.9%)が多く、ドリブル技術はParallel(57.3%)を使用し横方向へ揺さぶりながら攻撃を展開していることが考えられる。クイックスローオフにおいては、ドリブルの高さ、ドリブル技術に有意差はみられなかったため、相手の防御状況に応じてドリブルの高さ、ドリブル技術を使い分けていることが考えられる。

共通点

速攻、クイックスローオフではドリブルをすることが有意に多い。遅攻では、ドリブルの回数は1回が有意に多く、ドリブルの高さはLow、ドリブル技術はParallelが有意に多い。クイックスローオフでは、HighとLowが同程度に使用され、様々なドリブル技術が発揮されている。

相違点

遅攻においてはLucとLukaは、ドリブル無しに比べてドリブル有りのプレーが有意に多いが、佐藤はドリブル有りに比べてドリブル無しのプレーが有意に多い。

【結論】

速攻において、ボールを運ぶ役割を担うセンタープレーヤーはドリブルを使用したプレーが多い。その中でHighのNearを使用している。遅攻において、世界トップレベルの低身長センタープレーヤーはドリブルを使用するプレーが多い。また、ドリブルの回数は1回、LowのParallelを使用したプレーが多い。低身長センタープレーヤーはドリブルをした後に1対1を行うプレーが多い。クイックスローオフにおいて、様々なドリブル技術が発揮されている。